

この読み物は、「**名目だけのクリスチャン**」向けのものです。

★**真のクリスチャン**は、天国に向かってまっすぐに歩いていきましょう。

まだ救われていない方々のために、どうぞこの読み物をご利用ください。

★**名目だけのクリスチャン**、信仰から離れてしまっている人、イエス・キリストを主として従うクリスチャンとしての**ふさわしい**生活を日々おくってはいない人のために、この読み物を**プレゼント**します。どれも、お読みください！ あなたに**100パーセント**関係のある、**100パーセント** 本当のことです！

(Copyright c..エターナル・ライフ・ミニストリーズ

<http://www.eternal-lm.com>

<http://www.tengokujigoku.info>

この表示付で紙面でのコピー・印刷・無料配布は自由です。

インターネット上への内容または画像の転載等は禁止されています)

《目次》

1. **地獄にいた牧師たち信者たち**

…カルメロ・ブレンズ牧師の体験

2. **人を赦さなかった人々は地獄で焼かれていた！**

借金を返さなかった人々も！ ビクトリア・ネヘールの体験

3. **地獄へ下った「教会員」**

…ケネス・E・ヘーゲンの体験

4. **人々を救いに導いていた女性が地獄の中にいた！**

恵みを受けそこねている人々とは？ ビクトリア・ネヘールの体験

5. **私は外の暗闇に連れて行かれた！**

…元『エホバの証人』信者の体験

★☆☆ あなたに**100パーセント** 関係のある

100パーセント 本当のことです！★★★

《地獄にいた牧師たち信者たち!》

…なぜ彼らは天国に行けなかったのか？

カルメロ・ブレンズ牧師の体験（スペイン系アメリカ人）

(Copyright c..エターナル・ライフ・ミニストリーズ

<http://www.eternal-lm.com>

<http://www.tengokujigoku.info>

この表示付で紙面でのコピー・印刷・無料配布は自由です。

インターネット上への内容または画像の転載等は禁止されています)

1982年、私は事故に遭い、その瞬間、私の命は取り去られました。その同じ瞬間、**すべてが暗くなる**のを感じ、私は**暗いトンネル**の中を歩き始めました。私を連れて行こうとしている、ある**存在者**が見えました。そして、**悲鳴やうめき声**が聞こえてきました。私は、私の命が自分から取り去られたことを理解していました。私は地上で生きることを終えていたのです。しかし、最も恐ろしかったのは、私たちがそのトンネルを通過している時、私の内側の**恐れ**がますますつのってきたことでした。私の体はすでに**死んでいても**、自分はどこかで**生きている**のだとわかりました。

私たちがそのトンネルの中をしばらく歩くと、突然、今まで一度も聞いたことのない、**苦しみあえぐ声やうめき声**が聞こえました。その**寒くて暗いトンネルの中**を私たちが歩き続けると、**何匹もの巨大な蛇**があちこち動いているのが見えてきました。また、別のうめき声や苦しみあえぐ声も聞こえてきました。

その場所には、とても奇妙なことがありました。その場所のほとんどすべての人に共通していることがあったのです。彼らはみな、その瞬間、**水のことを考え、泣いてそれを求めている**のです。

私たちが進み続けると、高原のような開かれた場所に着きました。そこには多くの**小部屋や区切られた場所**があり、さまざまな人々が入っていました。

私はおびえて叫び出し、神にあわれみを求めました。

「主よ、私の命を忘れないでください！ あわれんでください！」

その時、私のたましいは**恐怖感**に襲われました。まるで私の全生涯がもう一度私の目の前で展開しているかのように感じました。私は、私を連れて行ったその存在者といっしょに歩いていました。私たちがいるドアに近づいた時、私は叫び声を上げました。

「私をあわれんでください、我が主よ、私をあわれんでください！ お願いします、私を助けてください！ 私を助けてください、主よ！！」

突然、沈黙が生じました。そして、「止まりなさい！」という声が聞こえました。その声のために、**地獄**のすべてが揺れ動きました。私の手を取って連れて行ったその存在者は私を放しましたが、私は地面に倒れませんでした。私は一つの場所で浮揚したままでした。

そして、もう一度、その声が聞こえました。

● 神は自慢する者たちの神ではない！

「私は姦淫する者たちの神ではありません、

私は淫行する者たちの神ではありません、

私は偽りを言う者たちの神ではありません。

私は自慢する者たちの神ではないのに、なぜあなたは私を主と呼ぶのですか？」

私は一瞬、私の全存在が滅ぼされようとしているのを感じましたが、次第にその存在者の声は穏やかになっていき、彼は私にこう言われました。

「来なさい、この場所で起きていることをあなたに見せましょう。それは、**私の道に従おうとせず、自分の心の想像のままに歩んできたすべての者を待っていることです**」

私はその場所で歩き始めました。そうする間、あのすべての**うめき声**が聞こえていました。それは、私のたましいをも押しつぶしてしまうほどでした。

突然、私たちはある小部屋の上で止まりました。そこには、一人の女性がロッキングチェアに座っていました。初めは、何も彼女に起きていないように見えたが、突然、彼女の体が**変貌**しました。というのも、彼女は魔女だったからです。彼女は激しい苦しみあえぐ声やうめき声で悲鳴を上げ、助けを求めました。なぜなら、彼女の全存在が**炎の中で焼かれていた**からです。彼女は**恐ろしい悲鳴**を上げ始め、自分を助けてくださいとだれかに懇願しました。

主が私に語りかけられ、こう言われました。

「**罪の報酬は死です。そして、この場所に行き着く者たちは、ふたたび出ることは決してありません**」

彼はまた、**地球の下方の数々の場所**も私に見させられました。それは、地球の割れ目に似ており、そこには煮えたぎる油のようなものがあって、炎の中で焼かれている者たちもいました。彼らは、その苦しみの場所にいる人間たちでした。彼らが外に出ようとした時、すぐに一匹の悪霊が来て、彼らをふたたびその場所の内部に戻しました。

主は私に次のことも示されました。**かつては福音派のキリスト教会に属していた大ぜいのクリスチャン**が、彼らの不従順のために、今やあの場所において、自分の命のために泣いてあわれみを懇願していることです。**あわれみ**は、もはや見出すことはできませんでした。なぜなら、あわれみが見出され得るのは、私たちが地上でまだ生きている時だけだからです。

そういう人々がいったん死んでしまうと、もうあわれみには手が届かなくなるのです。主がみことばで言うておられる通りです（ヘブル9・27）。

私たちは歩き続けて行き、ある非常に特別な場所に着きました。そこには、かつて神のことばを聞いたことがあったのに一度も悔い改めようとしなかった人々がいました。ある女性が二人の子どもと一っしょにいるのに、私は気付きました。子どもたちは母親にせがんで、こう尋ねていました。

「なぜ？ なぜ私たちが日曜学校に連れて行ってくれなかったの？ どうして私たちが教会に行くのを許してくれなかったの？」

そして子どもたちは彼女を呪いました。なぜなら、彼らはかつて、神のことばを聞きに教会に行きたかったのに、彼らの母親は彼らが福音を聞きに教会に行くのを決して許さなかったからです。

● 地獄にいた牧師・伝道者・宣教師たち！

彼はまた、私をある場所のそばに連れて行きました。そこには、**牧師たちや伝道者たちや宣教師たちや、大ぜいの信者たち**がいました。彼らはさまざまな理由で、そこにいました。

私の注意を特に引いた一人の**牧師**が見えました。この人は**聖霊の力**も、**異言で話すこと**も、**聖霊のバプテスマ**も、決して信じてはいませんでした。彼はまた、**主のいやし**も決して信じていませんでした。

ところが、今や彼はあわれみを求めて懇願しており、そこから出て、「異言で話すのは本当のことであり、聖霊は現実のお方であられること、そして主の福音の内に本当の自由があること」を世界に告げるためにもう一度チャンス求めて懇願していました。

しかし、彼には遅すぎました。彼はその場所を離れることはできませんでした。なぜなら、彼が自分の悪を悔い改めるための彼の時間は、彼が地上にいる間だったからです。ただし、彼は福音派のキリスト教会に属していて牧師であった時でも、あわれみを求めたことはありませんでした。

そこには一人の**宣教師**もいました。彼はアフリカである宣教団体を開設するためにお金を募りましたが、そのお金を半分しか使いませんでした。彼は残りのお金を自分のために取りました。そして今や彼はその場所であわれみを求めて懇願し、自分のお金ではないそのお金を返すためにもう一度チャンス求めて懇願しているのです。彼は、自分のお金ではないそのお金を奪うために**偽り**を言ったことを覚えており、あわれみと赦しを懇願しているのです。

ところが、自分にあわれみが与えられることはあり得ないとわかると、イエス・キリストを呪うのです。

みなさんにお話ししたいと思います。あなたがこの**地上**で生きているのと、**あの拷問の場所**にいるのとでは、全くちがうのです。かつて教会の中でイエス様の御名をほめたたえていた人々の口から、地獄であなたは彼らの恐怖や苦痛の叫び声やうめき声を聞くのです。今や彼らはその場所で自分の罪のためにあわれみを求めて叫んだり懇願したりしているのです。

しかし、かつてこの地上で彼らにはその**チャンス**があったのです。**今や彼らは、あの永遠で最後の裁きをただ待っているのです。**

そこには牧師たちもいました。なぜなら、彼らは自分の教会から**十分の一献金や献金を盗んだ**からです。今や彼らはただ一度のチャンスでも望んでいますが、もはやそれが与えられることはあり得ません。そのもう一度のチャンスは、この地上でのみ見出され得るものなのです。彼らは自分のすべての悪行を取り消そうと、昼も夜も絶えることなく叫びながら過ごしているのです。悔い改める機会、あなたが地上で生きている間です。なぜなら、この人生の後、もはやチャンスは全くないからです。イエス・キリストなしに死ぬ人々は、**地獄**に行きます。そして、イエス・キリストとともに死ぬ人々は、**永遠の命**へと進みます。

あなたは永遠を地獄で過ごしたいでしょうか、それとも、栄光の中で過ごしたいでしょうか？ 今この時間、あなたはまだ選択することが**可能**です。

● 恐ろしい拷問・地獄にいた少年少女たち！

私たちは歩き続け、ある恐ろしい場所に着きました。そこには、あらゆるタイプ・形・姿の悪霊どもがいました。腕が一つで、目も一つ、足も一本の悪霊どもがいました。その足の先は、子馬の爪に似ていました。彼らの顔は、半分は人間の顔のようで、残りの半分は何もありませんでした。

私は主に、「主よ、これは何でしょうか？」と尋ねました。

すると彼はこう言われました。

「これらは、滅んだすべての者たちの住まいにいる、滅びの悪霊どもです。これは、毎日休むことなく滅ぼし、また滅ぼし続ける悪霊です」

その場所での拷問は恐ろしいものです。人々が地上にいる間に行なったすべてのことをじっくり思い起こすこともできないくらい、恐ろしいものです。ルカ16章19節以下に書かれているのと同様です。

その場所には、**十二歳から十四歳の少年少女たちもいます**。私はそれを思い出す時、私のたましいにその苦痛と恐怖を今でも感じます。彼らもこの地上で行なった多くのことを後悔しています。

「私の子どもはまだとても若いから、滅んで地獄に行くことはない」と信じている人が大ぜいいます。しかし、あなたに言わせてください、もしあなたの子どもたちが**主の道**にいないなら、そして、善と悪をすでに区別できるのなら、**彼らもその拷問の場所にたどり着くこととなります**（黙示録20・12参照）。

善と悪を理解し区別することのできるすべての人は、いずれ主の御前に立たなければならなくなります。主の目から隠されているものは何もありません。

私たちはさらに歩いて行き、サッカー場のような場所に来ました。悪霊どもがあざ笑っていた対象は、人間たちでした。悪霊どもの喜びは、人間を拷問で苦しめることでした。悪霊どもは人々の**肉片**を引きはがし、それを人々から隠し、人々に探させました。それが悪霊どもをととても楽しい気分させていました。なぜなら、それが人々に**激痛と拷問の苦しみ**をもたらしたからです。その場所では、人々は自分が生まれた日をも後悔しています。人々は自分がイエス様と出会わなかったことを残念に思っています。また、イエス様と出会った多くの人が、主の道から離れて歩んだことを後悔しています。しかし、すでに遅すぎます。

私たちはその悪霊どもが人々にどんな拷問をしているのか見ていました。彼らは一つの**目を取り出し、それを隠しました**。人間たちが苦しみながらやっとの思い出を探しているのが見えました。悪霊どもにとって、その人を見るのが大きな喜びでした。別の悪霊どもは人間の片足を取り去り、その人がジャンプして足をひきずりながら、なくなった自分の体の一部を探すのを見ていました。彼らは別の人の片腕を取り去り、その人が感じる苦痛のことであざ笑いました。

その場所にいた時、私は**大きな恐怖感**を覚えました。私は自分が見ているすべての拷問で、激しい恐怖を感じました。私は、あわれみを求めて泣いて懇願しているすべてのたましいのために、大きな痛みと同情を覚えました。私は自分の全存在が弱くなっていくのを感じました。しかし、主はそこで私に力を与えてくださり、私にこう言われました。

「多くのことが今なおすべての人を待ち受けているようすを、あなたに見せましょう」

私たちはさらに歩いて行き、別の小部屋のところに来ました。そこは、端々が燃えていました。泣いて苦しんでいるたましいたちがいました。そして、彼らに何が起きているのか、私に見えてきました。ガスのような**炎で拷問を受けていた人々**は、**かつて神の祭壇に立ったことのある人たち**でした。彼らはカルトを指導し、神のことばを宣べ伝えていましたが、今や拷問を受けていました。なぜな

ら、ある日、彼らは神の聖なる道から離れて歩む決断をしたからです。

私たちはそこに立ち、炎の中で焼かれて苦しんでいるすべての人々を見ていました。私たちに見えるのは濃い灰色の骨ばかりでしたが、彼らはそれでも苦痛を感じることができたのです。彼らは話すこともできました。主がその瞬間彼らのそばを歩いて行かれるのを彼らを感じ取った時、彼らはあわれみを求めて懇願することもできたのです。彼らは大きな悲鳴を上げて叫びました。

「イエス様、どうか私たちをあわれんでください！」

しかし、あわれみのための時間は、きょうなのです。

● 二重生活者・35年間牧会した女性！

私たちはさらに歩いて行き、ある場所に着きました。そして主は私にこう言われました。

「この広い道を見なさい」

私が立ってその道を見つめると、大ぜいの信者たちが手に聖書を持っているのが見えました。彼らは手を上げていました。祈っている者たちもいれば、叫んでいる者たちもいました。主の道は右の方へと続いていましたが、彼らは地獄へまっすぐに歩き続けていました。

私は主に、なぜ彼らはあの道を進んでいるのですかと尋ねました。彼は私にこう言われました。

「彼らには二重の生活があります。彼らは二つの生活を生きているのです。一つは、私の祈りの家の中で、そしてもう一つは、彼ら自身の家の中です」

私は主に言いました。「しかし、主よ、この人たちは、あなたの御名を賛美しているところから来ています！」

すると彼はこう言われました。

「そうです、そして彼らが私のことで、あるいは私に対し、泣いたり、叫んだり、立派なことを言う時でも、彼らの心は姦淫に満ちており、邪悪に満ちており、偽りに満ちており、欺きに満ちており、憎しみに満ちており、苦々しい思いの根に満ちており、悪い考えに満ちています」

その時、私はマタイ7・21のみことばに書かれていることが理解できました。

「私に『主よ、主よ』と言っている者がみな天の御国に入るようになるのではありません。天におられる私の父のみこころを行っている者が、入るようになるのです」

あなたがこの地上でクリスチャンとして生きたはずなのに、死んだら天国に行かず、あなたのたましいが救いを受けないとしたら、どんなに悲しいことでしょう。

「あなたは自分が神のみこころを行っているかどうかを、きょう、思い巡らしてじっくり考えなければならぬ」と私は思います。もしキリストがきょう来られるとしたら、あなたは彼といっしょに行けるでしょうか？

私はあなたにこう呼びかけたいと思います。次のことを、きょう、よく考えてください！

「私は天国に入りたいと思っているのだろうか？ 私が行なっているクリスチャン生活は、神様を喜ばせているだろうか？」と。

きょうは、自分のあやまちを認識して主に心を向けることがまだできる時です。

きょう、あなたがこのことを読んでいたら、きょうが主に立ち返るべき日なのです！

きょうが、あなたがイエス・キリストをあなたの個人的救い主として受け入れ、地獄の束縛から逃れることのできる日なのです。

私たちはその場所の内部へさらに歩いて行きました。すると驚いたことに、「**自分は地上で確かに聖い者だった**」と信じていた人々が、あわれみを求め、もう一度のチャンス을求めて懇願していました。彼らはそこで、こう言っていました。

「主よ、どうか私をあわれんでください！」

私は彼らといっしょに主に懇願していました。私は、私をあわれんでくださいと主に懇願していました！ 私のたましいが痛みを覚えている間、私はそれらのたましいたちのためにも**激しい痛み**を感じました。私がとても激しい痛みを覚えていた時、人々がその場所で自分の体を引きずるようにしながら、あわれみを懇願し、赦しを求めるようすが見えました。

私たちは、ある女性がいる場所に着きました。彼女は、自分が**神のことばを読み、ヨハネ3・16について説教しているかのような仕草**をしていました。彼女はこう言いました。

「神は、生まれたひとり子であられるご自分の御子をお与えになったほどに世を愛されたからである。それは、彼を信じる者がみな、滅びることなく、永遠の命を持つようになるためである」

私は主に尋ねました。「この女性は自分が説教したことや自分が福音メッセージを語ったことを思い出すこともできるのに、なぜここにいるのですか？ なぜ彼女はこの場所にいるのですか？」

彼は答えて言われました。「なぜなら、彼女は彼女の夫を決して**赦すことができなかった**からです。彼女は、彼女の夫を決して赦そうとはしませんでした」

マタイ6・14、15にこう書かれています。

「もしあなたがたが人々に対して彼らのあやまちを赦すなら、あなたがたの天の父はあなたがたに対しても赦してくださいます。もしあなたがたが人々に対して彼らのあやまちを赦さなければ、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをお赦しにならないからです」

私は尋ねました。「主よ、救いを失うのは、こんなに簡単なことなのですか？」

その女性は、ある福音派の教会を35年間牧会してきた人でした。その瞬間、彼女の人生が彼女の目の前で映し出され、彼女は自分が夫を決して赦すことができなかったのを見ました。今や彼女は、彼女の夫を赦すためにもう一度チャンスを求めて懇願しているのです。

しかし、私はみなさんに言いたいと思います、あなたが夫か妻とのことで問題を持っているなら、**きょう、赦してください！**

あの女性は35年間教会を牧会してきたのに、彼女の人生の中のたった一秒で何もかも失ってしまったのです！ きょう、よく考えてください！

きょう、反応を起こしてください！ あなたはどのような生活をおくっていますか？ あなたは**永遠**をどのように過ごしたいと思っているのでしょうか？

●回心したエイズ患者

私には実の兄弟が一人います。彼はこう言っていました。「私が死んだら、地獄へ行って、悪霊どもに私を炭火で焼かせてやるよ。それに、悪霊どもが火の中に石炭をくべるのを私が手伝ってやるよ」

しかし、主の裁きが彼に達したことをお話ししましょう。私が今こうしてこのメッセージを記録している間も、彼は体に**エイズ**が感染して横たわっています。そして、今や神にチャンスを求めて懇願しています。彼は心を主のほうへ向け、回心しました。なぜなら、彼はもう今までと同じようには考えていないからです。**今や彼はあの拷問の場所に行きたいとは思っていません。**今や、彼は自分の口

を開けて、「悪霊どもに自分を炭火で焼かせてやる」と言うのが簡単ではないことがわかっています。

「私はそこに行って、拷問を受けたい」と口で言うのは、実際にその拷問の場所にいるのと同じことではないのです。神のあわれみのゆえに、私の兄弟は彼の命の救い主としてイエス様を受け入れました。ただし、私はみなさんにお話ししたいことがあり、注意して聞いていただきたいと思います。私の兄弟にそのチャンスがあったのは、彼の生活でその病気が進行中だったからです。

けれども、あなたは、どのようにして、いつ死ぬことになるのでしょうか？ 主に自分を赦してくださいと求める時は、この瞬間以外に別の機会があるのでしょうか、それとも、あなたは主に赦しを求める時間なしに即死するのでしょうか？ 今この時、どうかよく考えてください！ あなたの命は、あとどれだけあるのでしょうか？

● 自称『福音派クリスチャン』たちの結末

私たちはさらに歩いて行き、ある頂上のところに着きました。そこには、『福音派クリスチャン』と自称する人々のグループがありました。彼らの住んでいた場所の近所に、アルコール中毒だった男性がいました。ただし、彼はイエス・キリストに回心していました。

ある日、彼の妻の体の具合がとても悪くなりました。彼は一軒一軒ドアをノックし、それらの「兄弟たち」のところに来て、彼らのうちの一人にこう言いました。

「私の妻の具合がとても悪いんです。彼女を病院に連れて行くために、少しお金をお借りする必要があるんです」

すると、その一人は彼にこう言いました。

「おまえの言いそうなことだ。だめだ！ ここにはお金はない！」

そして彼は別の人の家に行きました。すると、またしてもその人は彼にこう言いました。

「私にはお金はない！ 私のほうがお金を必要としているよ！」

そうして彼はその兄弟たちの家を一軒一軒訪れ、彼の妻を病院に連れて行く運搬のためのお金を求めました。しかし、彼らのうちのだれも、彼に何も与えませんでした。そして、その男性の妻は死にました。その後、彼らは互いを「兄弟」と呼び合い、こう言いました。

「わかったかい、兄弟？ 我々があのアル中に教えてやった教訓のことだよ？ あいつはバーに行って酒を飲むお金が欲しかったのさ。ところが私はあいつに引っかからなかったよ！ あいつが本当にしたかったのは酒を飲むことだったんだ。だが私は彼に1ペニーもやらなかったよ！」

それから別の「兄弟」も、その男性が自分のところに来た次第を話し始めました。こうして、彼らはみなその話をしました。

しかし、悲しいかな、彼らの一人は火と炎で焼かれ始め、苦痛におびえる大きな叫び声を上げ始め、自分が地上で行なったすべての悪いことを後悔してうめき始め、こう言っているのです。

「主よ！ 私の人生で私が行っていたあの悪が、私の悔い改めようとしないう心には、どうしてわからなかったんでしょう？」

しかし、聖書は、神の子どもたちとは、神の御霊によって導かれている者たちであると、はっきり言っています（ローマ8・16）。

それから、ほかのすべての者たちも火と炎の中で焼かれ始めました。彼らは、あの男性が訪れて自分たちのドアをノックしたあの日を思い出し、泣いて後悔し始めました。彼らは、この男性が訪れて

彼らに頼み事をしたあの瞬間を思い出し始めたのです。

ある日、あなたが地獄にたどり着き、あなたがかつてこの証しを読んだことを思い起こすことになるのか、それとも、ある日、あなたはあなたの人生の釈明を主にしよう告げられるのか、私は知りません。

もしかすると、あなたはイエス様の福音を聞いたのに、悔い改めたいとは思わなかったのかもしれませんが。しかし、その日は、あなたの人生で**最も悲しい日**となることでしょう！

そういういくつもの体が炎の中で焼かれていましたが、一本のロープで縛られていました。それらの体は濃い灰色をしていました。**彼らは苦痛と恐怖の中で後悔し、うめき、叫ぶ以外に何もできませんでした。**なぜなら、**その苦痛は耐えがたいもの**だったからです。彼らの**肉**は、ほとんど溶けており、彼らの体から落ちました。彼らの皮膚は彼らの体から落ち、彼らは**濃い灰色の骨**にすぎないまでになりました。私がみなさんにお話ししたいのは、**この苦痛と拷問は永久のものである**ということです。**終わりのない拷問**が存在するのです。それは決して終わらないのです。これらの人々はみな、自分が心の中にどんなにたくさんの悪を抱いていたかを覚えています。

このことに耳を傾けてください！ **これは何かの映画ではありません！**

これは、作り話でも、おとぎ話でもありません。これは、本当に起こったことなのです！

これは、私の人生で起こったことなのです！

● 私は虚栄心のある「うぬぼれ」牧師だった！

どうか注意して私の言うことに耳を傾けてください。**私は福音派のクリスチャンでした。**私はイエス様に回心しました。私が病人たちのために祈ると、神は彼らをいやしてくださいました。私が足の不自由な人々のために祈ると、神は彼らを立ち上がらせてくださいました。私は悪霊どもを追い出し、異言で語りました。しかし、私の生活の中に**虚栄**の霊が入っていました。それは私を、**「私の牧師は私より霊的に劣っている」**と見るようにさせたのです。

時々、人々は、私の牧師にいやしの祈りをしてもらうために教会に行きました。何も起こらないと、彼らは次の日、**私**に祈ってもらうためにやって来ました。私が彼らのところに来て、みことばだけ与えると、神は私が言ったことばをサポートしてくださいました。

けれども、私は、**「それは私なのだ」、「神のみわざを生じさせているのは私なのだ」**と考えるようになったのです。私は、**自分は大した人間なのだ**と、自分の虚栄心の中で思っていました。**私は、並はずれて賜物を与えられた者か特別な人間なのだ**と、自分で勝手に理解していました。私はあの場所に行って私にこう語られるまでは、それは私の人生にある神の**あわれみ**なのだということが理解できませんでした。

神はこう言われました。「私は虚栄心のある人々の神ではありません」 その時私は、**プライドと虚栄心に満ちて祭壇に立つ人々**が私たちのうちに大ぜいいることを理解することができました。美しい声で主に賛美を歌うのを主が許しておられる人で、プライドでいっぱいになっていく人が大ぜいいます。神のことばを宣べ伝えて神に用いられている人々で、**「自分はとても重要なのだ」**と思うようになる人が、何と多くいることでしょう。神が解放の賜物を与えておられる人々で、プライドでいっぱいになり、**「自分は重要人物なのだ」**と思うようになる人が何と多くいることでしょう。

みなさんにお話ししたいのは、神はあなたが歩む一步一步を、あなたがする一つ一つの動きを見ておられるということです。神はあなたに耳を傾けておられ、あなたの心を知られます。

今この証しを読んでいるあなたにお話ししたいと思います。もしあなたが心に**虚栄やプライドやごう慢**を持っているなら、もしあなたが自分の兄弟や牧師を**軽蔑の思い**で見ているなら、どうか、今この時、あなたの罪を悔い改めてください！ 人々の前で辱められるほうが、主の御前で辱められるより、ずっとましです。

いつか一瞬、ほんの一瞬だけ、今この証しを読んでいるあなたがあの場所を見ることができればいいのに、と私は思います。**とても恐ろしく、たましいを恐怖で満たす、あのうめき声や苦しみあえぐ声や泣き声**を、あなたが一瞬でも聞くことができればいいのに、と私は思います。どの人の心の奥底にも届くことのできる、あの泣き声を、です。「主よ、私をあわれんでください！ 主よ、私をこの場所から連れ出してください！ 主よ！ あなたの手を伸ばして私をこの拷問の場所から連れ出してください！」と泣き叫ぶ声を、です。その瞬間、彼らは自分の人生におけるあらゆることを思い出しているのです。

あの場所に永遠にいることが、どんなに悲しいことかを、みなさんにわかってもらえたらと思います！ その瞬間のあなたの**苦痛がどんなに激しいもの**となるか、**あなたがあの場所にたどり着くとしたら**どんなに悲しいことか、あなたは認識しているでしょうか？

私たちはさらに歩いて行き、『控えの間』と呼べそうな場所に着きました。ある存在者が来て、叫びました。彼が叫ぶと、すべての悪霊どもが彼の前に出て来ました。二人の**非常に美しい女**がいました。それらの悪霊どもは、地上で数々のミニストリーを破壊したり、牧師やミニストリーに対抗して立ち上がる仕事を持っていました。若くて非常に魅力的な女性が、だれか神の奉仕者に近づこうとするのを、みなさんも時折目にしているかもしれません。それが目的なのです。悪魔が、それらの悪霊どもに仕事をさせているのです。

この証しのポイントは、次の通りです。私は福音派クリスチャンの生活をして、神によって非常に用いられていましたが、私の心の中には**虚栄心**があったということ、みなさんに認識してほしいのです。そして私は特に**悔い改め**への呼びかけをしたいと思います。あなたのあやまちをあなたに気付いてもらうための呼びかけであり、あなたが福音派クリスチャンの生活をしていても、**主の目には**清くないこともあるとの呼びかけです。

きょう、あなたは心と知性を一新することができます。あなたが今この証しを読んでいて、イエス様をまだ心に受け入れてなく、彼をあなたの救い主として受け入れたいと思うなら、次の信仰の祈りをささげることができます。

「主イエス様、今この時、私はあなたの御前で、私の罪とあやまちの赦しをあなたに求めます。私の人生で私が行なってきたすべての悪を、主よ、私はすまなく思います。私はあなたに私の心の中に入れていただくよう求めます。きょう、私はあなたを私の命の唯一で十分な救い主として受け入れます」

もしあなたが**生ぬるくて、二重生活をしている人**なら、今その場で、主の御前に頭を下げ、彼にこう言うてください。

「主イエス様、私をあわれんでください。きょう、私はあなたの御前に来て、あなたの赦しと、あなたとの和解を求めます。私の名前を命の書に書いてください。そして、あなたの聖霊で私を満たしてください。アーメン」

★★★ あなたに100パーセント 関係のある

100パーセント 本当のことです！★★★

《 人を赦さなかった人々は 地獄で焼かれていた！

…借金を返さなかった人々も！ 》

…ビクトリア・ネヘールの体験（アフリカ・ナミビア共和国）

(Copyright c..エターナル・ライフ・ミニストリーズ

<http://www.eternal-lm.com>

<http://www.tengokujigoku.info>

この表示付で紙面でのコピー・印刷・無料配布は自由です。

インターネット上への内容または画像の転載等は禁止されています)

私はナミビアで生まれ、育ちました。2005年2月6日に私はイエス様に私の命を献げました。主イエス・キリストは霊的世界の多くのことを私に啓示してくださり、それには地獄への訪問も含まれています。

主は、私のさまざまな体験を人々に伝えるよう私に言われました。また彼は、私に示したり語られたどんなことにも、何も付け加えることをせず、何も省くこともしないようにと私に警告されました。

この証しを書いている2006年の終わりまでに、私が主イエス・キリストの訪れを経験したのは33回です。そのいずれの訪れの時も、主は帰られる前に、「時間は速く終わろうとしています」と私に言われました。

● 地獄への第一回目の訪問

2005年7月23日の週末、私が働いて住んでいるオندانワの町から、私の故郷の村まで30分間タクシーに乗りました。その週末を私の両親と過ごすためでした。私が帰る途中、何か普通ではないことがその晩起ころうとしていると感じました。

私が家に着いたのは午後六時ごろでした。それは人々が夕食の準備をしている時間でした。私は台所で家族といっしょにおり、地面の上の古いシートの上で腰を下ろしていました。幼い姪や甥たちは

日曜学校の歌を歌っていました。

突然、私は聖霊による強い油注ぎが私の上に臨むのを感じました。私の体は非常に弱くなり、私は神の御力の下で意識を失いました。

一人の男性が見えました。彼は長くて白い服を着ておられ、同じ色の帯を締めておられました。そして、私が横たわっているほうへ歩いて来られました。彼の周囲に輝いている光がありました。それは彼から放たれているようでした。彼は褐色のサンダルを履いておられました。彼の容貌は中東の人々に似ており、美しい日焼けした皮膚でした。

彼の顔は非常に優しくそうで、栄光で満ちておられましたが、私は彼の目を見つめることができませんでした。彼が語られた時、その声は柔和で、優しく、愛があり、しかも権威がありました。彼の存在そのものから愛が波のように発せられていました。

彼は片手を私のほうに差し出され、私が横たわっていた場所から私を引き上げられました。突然、私は、変えられた美しい体の中にいました。私は十八歳の時に、それと同じものを見たことがあります。私は白い服を着て、白い帯を締めていました。私の長服は白色でしたが、その材質は、この方の長服とはちがっていました。彼の長服は絹のようで、私には描写の仕方がわからない輝きがありました。

彼は、とても愛のある優しい声で、こう言われました。

「ビクトリア、私といっしょに来てほしいのです。

私はあなたに恐るべき物事を見せましょう。

私は、あなたが全生涯で一度も行ったことのない場所に、あなたを連れて行きます」

彼は私の右手をお取りになり、私たちは行きました。まるで私たちが空気の上を歩いていて、ずっと上昇しているように私は感じました。

途中で、じはらくして、私は非常に疲れ、私は旅を続けることができないと彼に言い、私を帰らせてくださいと彼に懇願しました。けれども、彼は私を優しく見つめて言われました。

「あなたは疲れてはいません。あなたは元気です。もしあなたが疲れたら、私があなたを負いましょう。しかし、今は、あなたは元気です。平安があなたにあるように。さあ、行きましょう」

私たちが着いた場所は、非常に乾燥しており、人間に知られているどんな砂漠よりもひどい所でした。どんな形の生命も全くありませんでした。一本の木も、草の葉も、どんな生き物も見えませんでした。そこは非常に憂うつにさせる場所でした。

私たちが、ある門の所に来ると、その方は私のほうを向いて言われました。

「ビクトリア、私たちはあの門を通して入ります。あなたが見るもので、あなたは恐れ、ろうばいすることでしょう。しかし、私があなたをどこに連れて行っても、あなたは十分に守られていることを確信して安心していなければなりません。

あなたの目をしっかり開け、私があなたに見せる一つ一つのことをよく見なさい」

私は怖くなり、泣き出しました。私は抗議し、私を連れ戻してくださいとその方に嘆願しました。私はその場所に入りたくないと言ったのは、中で起こっていることが門を通して見えたからです。

彼は私を見つめて言われました。

「平安があなたにあるように。私はあなたといっしょにいます。私たちは中に入らなければなりません、時間が速く終わろうとしているからです」

● どんなに熱い火よりも熱い場所

私たちはその門を通過して入りました。私はその場所の**恐ろしさ**をみなさんに描写することができません。私は、これほどひどい場所は宇宙全体の中で他に一つもないと確信しています。その場所は、この上なく**広くて**、私は、ここは常に拡大しつつあると感じました。

そこは、この上なく**暗い場所**であり、その**熱さは測ることができない**ほどでした。つまり、**どんなに熱い火よりも熱かったのです**。私には火の炎が少しも見えず、その熱の源も見えませんでした。そこは確かに熱かったのです。

その場所は、あらゆる大きさの**ハエ**がいっぱいいました。**緑色や、黒色や、灰色のハエ**でした。想像できるあらゆる種類のハエがそこにいました。

しかも、**短くて太くて黒い虫**がいたるところにいて、あらゆるものの上をよじ登っていました。これらの**虫**は私たちの上によじ登り始め、**ハエ**も私たちの上を覆っていました。

その場所は、この上なく**不快な悪臭**で満ちていました。その場所の悪臭のひどさを描写することはありません。そのにおいは、**腐ったりんご**のようでしたが、私の生涯でかいだことのある最も腐った肉より、**百倍もひどいにおい**でした。その場所は**泣き声や歯ぎしり**で満ちており、**悪魔的な邪悪な笑い声**もありました。

この場所について最悪のことは、**そこが人々でいっぱいだったことです**。数え切れないくらい、とても大ぜいの人々がいました。その人々は、**骸骨**の姿をしていました。私が確信をもって言えるのは、それらの骸骨が**人間**であったということです。なぜなら、私にとっても近い親族たちや私の村の人々を私が認識できたからです。彼らの骨は**暗い灰色**で、この上なく乾いていました。彼らには、**野獣のような長くて鋭い歯**がありました。彼らの口は大きくて開いており、彼らの舌は長くて明るい赤色でした。彼らの手足には、ほっそりした指があり、**長くて鋭い爪**がありました。**尾や角**のある者たちもいました。

その人々と混ざっている**悪霊ども**がいました。その悪霊どもの姿は**ワニ**に似ていて、彼らは四つ足で歩いていました。彼らはその環境で心地よさそうにしており、**人間たちをいじめたり、拷問で苦しめたり**していました。悪霊どもが立てている騒音は、むしろ祝い事のようなものでした。なぜなら、彼らは幸せそうで、心配がないように見えたからです。また彼らはいつも**踊ったり跳んだり**していました。

他方、人間たちは、**みじめで落胆**しているように見えました。つまり、彼らは、頼るすべのない、望みのない状態の中にいたのです。人間から聞こえる音は、**苦痛**によるものでした。彼らは**泣いており、悲鳴を上げており、歯ぎしりしており、想像もつかない苦痛と苦悩の、死に物狂いの状況**でした。

この場所にいた人々は、数え切れないほど大ぜいでしたが、その大多数が**女性**であるのが、はっきり見えました。彼らはいくつもの別々のグループに分けられていました。彼らがそれらのグループにいても、一つのグループにいる人数を見積もるのは不可能でした。なぜなら、それらのグループは、**とてつもなく大きかった**からです。

● 赦さなかった人々・借金を返さなかった人々

その方は、その場所の東側の一つのグループに私を案内されました。彼は私を見つめて言われました。

「ビクトリア、これは、**人々を赦すことを拒んだ人々のグループ**です。私は彼らに何度も、さまざまな方法で、人々を赦すようにと語りましたが、**彼らは私を拒絶しました。私は彼らのすべての罪を赦したのに、彼らは人々を赦すことを拒絶したのです。**

彼らの時間は終わりとなり、彼らは自分がここにいるのに気付いたのです。**彼らはここに永遠にいることとなります。**彼らは自分の行いの実を永遠に食べるのです。けれども、彼らがこの恐ろしい場所において、この永遠の状況の中にいるのを見るのは、私にとって心が痛むことです。なぜなら、**私は彼らを愛しているからです**」

それから私は次のグループに案内されました。その方は私に、二番目のグループにいる人々は、**借金のあった人々**であると語られました。そのグループには三つの異なるカテゴリーがありました。

第一のカテゴリーは、**他の人に負債があり、自分が当然支払うべきものを払う余裕があったのに、それを延期し、ぐずぐず先延ばし続けた人々**でした。彼らは明日、次の週、次の年に払うと主張しましたが、ついに彼らのために時間は終わりとなり、今や彼らは自分がこの場所にいるのに気付いたのです。**ここは、彼らが永遠にとどまることになる場所です。**彼らは自分の行いの実を食べているのです。

第二のカテゴリーは、**返済する余裕のある借金があり、自分の借金を返そうとしていたのに、その結果を恐れていた人々**でした。もしや、真実を語れば、人から拒絶されるかもしれない、あるいは、刑務所に入ることになるかもしれない、あるいは、自分がしてきたことが世の中全体に知られてしまい、自分は辱められることになるかと恐れたからです。

その方は言われました。「**彼らのうちのだれ一人、何らかの方法を求めて私のもとに来ませんでした。もし彼らがそうしていたら、私は簡単な解決方法を彼らに示したことでしょう。**彼らは自分自身の知恵と理屈を使いましたが、それは彼らには決して役立ちませんでした。彼らの時間は終わりとなり、彼らは自分がここにいるのに気付き、**彼らはここに永遠にいることとなります。**彼らは自分の行いの実を食べているのです」

それから彼が言われました。「**第三のカテゴリーの人々は、返済する余裕のない借金がありましたが、この場合もまた、彼らの内のだれ一人、自分には返済することのできない借金があると私に告げませんでした。**もし彼らがそうしていたら、私が彼らの借金を払ったことでしょう。彼らも自分自身の理屈と知恵を使いましたが、それは彼らには決して役立ちませんでした。今や彼らは自分がこの場所にいるのに気付き、**彼らはここにいつまでもいることとなります。**彼らは自分の行いの実を食べているのです。

私の心は、このすべての人々のゆえに痛んでいます。なぜなら、**私は彼らをととても愛しているからです**」

● ののしる人々・偽善の牧師

その第一のグループの中に、私にととても近い**二人の女性の親戚と、十二歳の親戚**が見えました。彼女が十二歳であると私が知っていたのは、彼女が亡くなった時にその年齢だったからです。

第二のグループの中にも、私は幾人かの親戚と、私がととてもよく知っている**一人の牧師**が見えまし

た。

私がキリストに私の命を献げたために自殺した私のボーイフレンドのジェイクスも、第二のグループにいました。いずれのグループにも私の近所の人々が見えました。

私が認識できた人々は、彼らが死ぬ前に私が知っていた人たちでした。彼らも私を認識できました。

私の親戚たちは、私を見た時、非常に怒っていて、私に醜悪なことばを叫び始めました。彼らは、この上なく下品なことばを使って私をののしりました。彼らのうちの一人は、私が、私といっしょにおられた方について行くのにふさわしくないといいました。

彼らは、私がキリストに私の命を献げる前に私がしていたことを話していました。彼らは偽りを言ってはいませんでした。彼らが私を非難していたそれらのことは、本当のことでした。

ジェイクスは、私は彼のものだ、私は彼がいる所に行くべきだ、私は彼と同じ罪を犯したのだから、と言っていました。

最初、あの牧師は私を見てうれしそうにし、私によくぞ来てくれたと言いました。しかし、私といっしょにおられた方を彼が見た時、彼の態度がすぐに一変し、それから彼ものしりに加わり、醜悪なことばを使い始めました。

私といっしょにおられた方は私に、彼らは自分が何をしているのかわかっていないので、彼らを無視するようにといわれました。

私は茫然自失して、この上なく悲しくなっていました。私の体は震えており、立っていることができませんでした。私は抑制できぬまま泣いていました。

その方は私のほうを向かれ、私を抱き締めてくださり、こういわれました。

「平安があなたにあるように、ビクトリア」

私の体力が戻って来て、私は彼の抱擁の中で大いなる安心感を覚えました。それから彼は私に、私たちがその場所を離れて帰らなければならないと言われました。彼は私を見つめて言われました。

「ビクトリア、私はあなたに見せました。今、あなたは自分がどのグループに入りたかを選ばなければなりません。その選択は、あなた自身の手の中にあるのです。あなたは見て経験したすべてのことを人々に語らなければなりません。ただし、何も付け加えても省いてもいけません」

私たちがその恐怖の場所をいっしょに立ち去ったことを私は覚えていましたが、私が彼とどこで別れたかはわかりません。なぜなら、そのあとで私は意識を取り戻したからです。

● 意識を取り戻してからの日々

私が目を開けると、私は自分の肉体の中に戻っていて、オシャカティ病院の中で横たわっていました。私の左腕には点滴が付いており、私の母と私の村の近所の人たちが部屋の片隅にいるのが見えました。彼らはそこで驚いて私を見つめていました。母の顔から、彼女がずっと泣き続けていたのがわかりました。

私は看護師の一人に、私の体のどこが悪いのかと尋ねましたが、彼女はジョークを言って、こう言うだけでした。

「あなたは送り返されたのよ。たぶん、あなたは何か悪いことをしてきたので、悔い改める必要があるのよ」

その看護師は私の状態について陽気に話そうと努めていましたが、私は、彼女が私に近づくのを恐れているのが見えました。私は、私を担当している医者を呼んでもらうよう彼女に頼みました。

彼が来ると、彼は、私の体のどこが悪いのかわからないと言いました。彼は最初、私がマラリアにかかったのだと考えていましたが、マラリアの検査結果は陰性でした。彼は続けて私に、私の体温も脈拍数も血圧も危険なほど低い、その原因を見つけることができないと言いました。彼は、私のためにできることは何もないと言いました。私が病気ではないため、彼は私を入院させておくことはできなかったのです。

彼らが施した点滴は、初めはうまく働いていませんでしたが、私が目を開けた時、それは働き始めました。彼は、私が帰宅する体力を得られるように、最初の点滴が終わったらもう一度点滴を施すよう看護師に勧めました。

私はあの場所で見ただけでおびえており、泣くのを止めることができませんでした。あの恐ろしい場所の悪臭が、私がそこにいた時と同じく現実のものとして存在し続けていました。

あの場所のさまざまな光景が、いつも私の前に現れていました。私は眠ることができず、体全体が激しく痛んでいました。私は、まるで自分の手足が全部ばらばらになり、それから再び元に戻ったかのように感じていました。ああ、私は恐ろしい思いでいたのです。私は丸一週間、下痢をし、どんどんたたくような頭痛もありました。

私の頭の中では、私の体験についてはだれにも話すまいと決めていました。なぜなら、だれが私のことを信じてくれるでしょう？ 人々はどう思うでしょう？ 私は決して自分の体験をだれにも話さないと自分に言い続けていました。

三日後、私の助言者の一人が私に電話をかけてきて、私の健康状態を尋ねました。というのも、私のために祈ってくださいというメッセージをメールで彼女に送ったからです。私は気付かない内に、私の体験を彼女に話していました。

自分のしていることに気が付いた時には、私はすでに話のほとんどを彼女に語っていました。私は自分を蹴飛ばしたい思いでした。私は泣きました。私は人生最大のあやまちを犯してしまったと確信していたからです。今や体験を話してしまい、それを隠すことのできる可能性はもはや全くありませんでした。今や私は、何か語られることを神様が望まれるなら、それはいずれ語られることになるのだとわかりました。結局、彼は神であられるのです。

● イエス・キリストの訪問

8月19日、私が目を覚ますと、私の肉体に聖霊による油注ぎの徴候を感じました。私は弱くて震えていましたが、その一方で、電気のような波が私の体を貫通していました。夕方、私は部屋に輝きのある光が入って来るのが見えました。その真ん中に、あの同じ方がおられました。この時、彼は私のベッドの隣のイスにお座りになりました。私は、そのイスがどこから来たのか全くわかりません。けれども、彼が座ろうとされた瞬間、そのイスがそこにあったのです。

それは金で造られた美しいイスでした。その形は、会議用のイスの形をしており、背もたれ付きでした。イスのどの脚も、金の中に銀の星が埋め込まれてありました。それと同じ星が、背もたれの中央にもありました。どの脚にも、回転する車が付いていました。

彼は私にあいさつをなさった後、私が彼について多くの質問を持っていることをご存知であること

や、彼が来られたのがご自分を私に明らかにし、私が経験したいいくつかのことがらを説明するためであることを、私に語られました。彼はこう言われました。

「私はイエス・キリスト、あなたの救い主です。

あなたに疑問があれば、私の手を見なさい。

私たちが行ったあの場所は、地獄です」

私が彼の両手を見つめると、釘が彼を突き刺した傷跡が見えました。

愛するみなさん、私がみなさんにお話ししたいのは、地獄はだれかの想像上の作り話ではなく、それは現実の場所であり、それは不愉快な場所であるということです。それは人々のために造られたのではなく、サタンおよび彼の悪霊どものために造られたのです。

私たちの正当な場所は、イエス様といっしょにいる天国ですが、私たちは手遅れになる前にイエス様を選び取らなければなりません。きょう、あなたが彼の御声を聞いている時、あなたの心をかたくなにしないでください。あなた自身の救い主としてイエス様をきょう受け入れてください、そして彼のために生きてください。地獄は恐ろしい場所です。それは恐怖と悲しみの場所です。それは、拷問と永遠の泣き声と歯ぎしりの場所です。サタンは、できるだけ多くの人々を自分といっしょに連れて行こうとしています。彼に協力してはいけません。イエス様に協力してください。そうすれば、あなたは死なずに生きようになります。

● 私に残っていた罪

私は、すでに新しく生まれ変わったクリスチャンであった時に、主が地獄で私に見させてくださったあの二つのグループから選ぶようにと、なぜ私に言われたのか理解できませんでした。私は彼を受け入れているのに、それでも彼は私に、私が地獄に行きたいのかどうか選択しなさいと私に語られました。私はそれが理解できませんでした。

私は祈り始め、彼がどういうことを意味されたのか、また私が何をすることを望まれたのかについて私に啓示を与えてくださるよう、神に求めました。

主は私に、私の姉妹の一人に対して、また、私のいところに対して、私が心の中に赦していない思いと憤慨を抱いていることを明らかにされました。私は、赦さない思いを抱いていたことを赦して下さるよう主に求めました。私は私の姉妹にも、彼女に対して心の中に怒りと苦々しい思いを抱いていたことを赦してくれるよう求めました。主は私に、行って、私のいところから赦しを求めるようにとお命じになりました。

また主は、私が詐欺的卒業証書により教職の仕事を得た時のことを、私に思い起こさせてくださいました。彼はそれを負債であり盗みであるとみなされました。

私は正しいことを行おうと決心し、この問題について私を助けてくださり、簡単な解決方法を私に示してくださいと主に求めました。なぜなら、これは重大な犯罪であり、私が刑務所に送られる可能性があることだったからです。主は私に、教育省に行き、私がしてきたことを告白するよう指示されました。

私は、もし避けられないことなら、刑務所に入ることも覚悟していました。私は主の好意を大いなる仕方で経験しました。教育省の役人たちは私に、私がどうしたいかを自分で決めるべきだと言いました。つまり、私が政府から受け取ってきた給料を払い戻すかどうかということです。彼らは私に対

して請求しないことを約束しました。なぜなら、私の告白で彼らはあ然としたからです。私たちの神は、ご自分のみことばを尊ばれる忠実な神であります。

もしあなたが、かつて私がいたのと同じような状況にいるなら、結果がどうなっても、正しいことを行うよう、あなたに勧めたいと思います。あなたは地上の監獄に留置されるかもしれませんが、それは**一時的**です。**どんな苦痛や恥辱も、神から離された永遠とは比べものになりません**。地獄は、すてきな場所ではありません。**手遅れになる前に**、神にあなたを裁いてもらうほうが、ましです。神の御前に自分を正す時間が私たちに**まだあるうちに**、私たちの生活の中の良くないどんなことでも神にあらわにさせていただかなければなりません。なぜなら、**死んでからでは赦しは全くないからです**。

●赦すことについては新約聖書マタイ6・14、15を参照。●借金については『**クリスチャンの繁栄**』（エターナル・ライフ・ミニストリーズ刊）をお読みください。

★☆☆ あなたに100パーセント 関係のある

100パーセント 本当のことです！★★★

《地獄へ下った「教会員」》

…ケネス・E・ヘーゲンの体験

(Copyright c..エターナル・ライフ・ミニストリーズ)

<http://www.eternal-lm.com>

<http://www.tengokujigoku.info>

この表示付で紙面でのコピー・印刷・無料配布は自由です。

インターネット上への内容または画像の転載等は禁止されています)

…私が彼ら一人一人への伝言を言うと、**心臓が止まりました**。三度目でした。

私は血液の循環が止まるのを感じました。突然、私の足の指が無感覚になりました。

指をぱちっと打ち鳴らすよりもすばやく、私の足の指、足先、足首ひざ、おしり、腹そして心臓が死んでいきました...そして**私は肉体から跳び出し、下り始めました**。

この時まで私はこう考えていました。

「これはぼくに起こっていることではない。これはただの幻覚だ。現実のはずがない！」

けれども、この時、私は「これで三度目だ。こんどは戻って来ないだろう！」と思ったのです。

私は、人間が見たことのない、**どんな夜よりも暗い闇**に取り囲まれました。聖書は、『外の暗闇』という場所に投げ込まれる男女について語っています。そこには「泣き悲しみと歯ぎしりがある」のです。(新約聖書マタイ8・12)

その暗闇の中で、私は叫びました。

「神様！ ぼくは教会に所属しています！ ぼくは洗礼を受けています！」

(おわかりのように、私は神様に「私はこんなところに来るべき者ではありません。私は間違ったところに来ています」と言っていたのです)

私は返事を待っていましたが、返事は来ませんでした。あるのはただ、暗闇にこだまする自分の声だけでした。

私は二度目に、もう少し大きな声で叫びました。

「神様！ ぼくは教会に所属しています！ ぼくは洗礼を受けています！」

私は返事を待っていましたが、返事は来ませんでした。ただ、暗闇に自分の声がこだまするだけでした。

もし私が三度目に叫んだその**悲鳴**を再現したら、聞く人々は正気を失っておびえてしまうことでしょう。

ただし私が人々をおびえさせることによって彼らを**地獄**から救い出して**天国**に入れることができる

のなら、私はそうするでしょう。

断然そうします！

私はまさに悲鳴を上げたのです。

「神様！ 神様！ ぼくは教会に所属しています！ ぼくは洗礼を受けています！」

しかし、おわかりのように、洗礼を受けるのは正しいことであっても、教会に所属するのは正しいことであっても、地獄を免れて天国に行くには、教会に所属して洗礼を受ける以上のことが必要なのです！

（「私は地獄に行った！」 [エターナル・ライフ・ミニストリーズ刊] より抜粋）

★★★ あなたに100パーセント 関係のある

100パーセント 本当のことです！★☆☆

《人々を救いに導いていた女性が 地獄の中にいた！

…恵みを受けそこねている人々とは？ 》

…ビクトリア・ネヘールの体験2（アフリカ・ナミビア共和国）

(Copyright c..エターナル・ライフ・ミニストリーズ)

<http://www.eternal-lm.com>

<http://www.tengokujigoku.info>

この表示付で紙面でのコピー・印刷・無料配布は自由です。

インターネット上への内容または画像の転載等は禁止されています)

● 地獄への第二回目の訪問

2005年十月十八日、私は午前五時半に目が覚めましたが、仕事に出かけられませんでした。私は体がとても衰弱していて、ふらふらしていました。私はベッドの中で動くことも寝返りを打つこともできませんでした。しかし主の御臨在が部屋にとっても強く臨んでいました。

私は震えており、体中に電気が流れているように感じました。主が私を連れに来られたのは、八時少し前でした。というのも、私が自分の腕時計を最後に見たのが七時四十八分で、それから少し後に彼が来られたからです。

彼は私にあいさつをされました。そして、私たちはまた行かねばなりません、時間が速く終わろうとしているからです、と言われました。

私は立ち上がり、私たちは歩き始めました。私たちがこの日歩いたその道は、いつもとは、とてもちがっていました。私たちの足は歩く動きをしていましたが、私たちは歩くというよりも、むしろ、浮かんでいるようでした。

私たちが進んでいく間、イエス様は私に、どんな罪も悪いものであり、小さな罪とか大きな罪というようなものは全くないことを話されました。

罪は、どんなに大きくても小さくても、すべて死に至るのです。主は私に、私たちはふたたび地獄を訪れようとしていることを語られました。

それから彼は、私が恐れていないかと私にお尋ねになりました。私は、恐れていると答えました。

● 恐れは信仰を破壊する

彼はこう言われました。

「**恐れ**の霊は、私の父から来ているのでも、私から来ているのでもなく、それは**悪魔から来ている**のです。**恐れは、あなたを地獄に至らせることになる物事を行わせる原因**となります」

信仰なしに神を喜ばせることは不可能であり、恐れは信仰の正反対のものです。恐れが神様を喜ばせないのは明らかです。なぜなら、それは、その人の信仰を破壊するからです。

私たちは進んでいた間中、横に並んで歩いていました。しかし、私たちが**地獄の入口**に着いたとたん、彼は私の片手を彼の御手にお取りになりました。そして、私たちが地獄にいる時も、いつもつかんでおられました。主が私の手をつかんでおられたことで、私はとても**幸せ**でした。なぜなら、彼の御手にしっかり握られて、私からどんな**恐れ**も取り払われたからです。

その場所は、依然として同じままでした。一回目の訪問の時と何もちがってはいませんでした。**ハエや虫や、ものすごい熱、あの臭い、骸骨、騒がしい音**が、そこにありました。どれも、私が第一回目に訪れた時と全く同じでした。

私たちは再びあの同じ醜い入口から入りました。

主は私を、あるグループの人々のところへ連れて行かれました。そこには、彼らがまだ地上で生きていた時に私が知っていた人々がいました。

そのかわいそうな人々は、恐ろしい状態の中にいました。彼らは、**みじめ**そうに見え、**大いなる苦悩**の中に見えるように見えたが、最悪なのは、彼らの顔が**希望のない表情**をしていたことでした。

● 地獄にいた中年女性

主は**一人の中年女性**を指摘されました。彼女が亡くなる前、私は彼女を知っていました。彼女は2005年の初めに交通事故で亡くなっていました。

その女性が**地獄**にいるのを見て、私は**ショック**を受けました。なぜなら、彼女が神を畏れ、神を愛していた人であることを、私たちはみんな知っていたからです。

主は私に、その女性は彼を愛し、彼も彼女を愛しておられたことを語られました。彼女が地上にいた時、彼女は主に仕えていました。**彼女は多くの人々を主に導いており、みことばをととてもよく知っていました。**

彼女は、貧しくて困窮している人々に対して**親切**でした。彼女は彼らに**施し**をし、多くのことで彼らを**助け**ました。**ほとんどの点で**彼女は主の立派なしもべでした。

主のそういうことばで私はいっそう**ショック**を受けました。

私は、主に**とても立派に仕えた人**を、なぜ地獄に行き着くようにさせるのですかと尋ねました。

主は私を見つめられ、この婦人は**悪魔の惑わし**を信じていたと言われました。彼女は聖書をよく知っていましたが、**大きな罪と小さな罪がある**という悪魔の偽りを信じていました。**彼女は、自分はクリスチャンなのだから、『小さな』罪で地獄に至ることはないだろうと思っていました。**

主は続けて言われました。

「私は彼女を幾度も訪れ、彼女がしていることをやめるように彼女に告げました。

しかし、彼女は、自分がしていることはあまりにも**小さなこと**であると何度も**理屈**を言い、私の警告を、彼女自身の罪悪感だとみなしました。

彼女は、しばらくの間それをやめた時期がありました。しかし、その後ふたたび、その罪はあまり

にも取るに足りないものであって聖霊を悲しませるほどのものではないから、その警告は私からのものではなく彼女自身の声なのだ、と自分を納得させたのです」

私は、この女性が犯した罪は何なのか教えてくださるよう、ふたたび主に尋ねました。すると彼は私にこのようにお答えになりました。

● 聖霊を悲しませたこと

「この女性に一人の友人がいました。彼女はオシャカティ病院の看護師でした。

この女性は、病気になった時はいつも、病院に行って自分の病院用のカードで正規の支払いをすることをしませんでした。彼女は友人に電話をかけ、病院の調剤室から自分のための薬を用立ててくれるようにと告げたのです。彼女の友人はいつも、ある特定の時間にその薬を取りに来るよう彼女に言わなければなりませんでした。

第一に、彼女は小さな罪と大きな罪について悪魔の偽りを受け入れることを決意し、私の真理を拒みしました。

彼女は、ほかの人に罪を犯させ、自分のために盗みをさせたのです。

しかし、最も悪いことは、彼女が聖霊を悲しませたことです。彼女が地獄にいるようになった原因は、それです。あなたが何百万人ものたましいを主に導いているかどうかは問題ではありません。それでもなお、聖霊を悲しませているゆえに地獄に行くことがあり得るのです。

あなたは人々の救いについて心を配らなければならないだけでなく、あなた自身のたましいのことも忘れないように注意しなければなりません。

どんな時でも聖霊に敏感でいなさい」

主はこれらのことばを言われた後、私たちは帰らなければならないと言われました。

この話を聞いた多くのクリスチャンが私にこう尋ねました。

「義とされることや、あわれみ、恵みはどうなるのですか？」

「それは少し厳しすぎませんか？」

「神様がそんなに残酷であることが、あり得るだろうか？」

私はここでどんな神学も提示していません。私はただ、主が私に示され、教えられたことを、そして彼が私に経験させてくださったことを、みなさんにお話ししているにすぎません。

どうか、あなたの聖書で答えを調べてください。

次の箇所を見て、ご自分で判断してください。

「私は、私の体をなぐり散らして従わせています。他の人々に宣べ伝えてきた私自身が是認されない者にならないためです」
(第一コリント 9・27)

「それでは、私たちは何と言いましょうか？ 恵みが多くなるように、私たちは罪にとどまり続けましょうか？」

そんなことがあってはなりません。罪に死んだ私たちが、どうやって、まだその中で生きるのでしょうか？」
(ローマ 6・1、2)

「真理をはっきり知る知識を受けた後、私たちが故意に罪を犯しているなら、もはや罪のために、い

けにえは残されていないのです。

あるのは、裁きを待つ恐ろしい予感のようなものと、敵対する者たちを食らおうとしている火の熱心さです」
(ヘブル10・26、27)

主にお仕えして大ぜいの人をキリストに導いた後、地獄に行くことがあり得るでしょうか？
みなさんがご自分で判断してください！

● 白いビーズの雨

2006年三月六日月曜日、私は五時半の目覚まし時計で目が覚めました。私は祈り始めると、重い油注ぎが私の上にあることに気付きました。私の体はとても弱くなっており、私は震えていました。電気の波が私の体を流れていました。

その午後、私はベッドの上で横たわっていると、輝いている光が部屋に満ちるのが見えました。とても小さな、白い、丸いビーズがいくつも見えました。針の頭ほどの大きさでした。

それらのビーズは雨のように降っていて、私の皮膚に触れたとたんに皮膚の中に入りました。

さらに、白い霧のようなものの雲が上から下って来るのが見えました。それも部屋に満ち、私の皮膚に触れたとたんに皮膚の中に入りました。その後、イエス様が霧の雲の中で私のほうへ歩いて来られるのが見えました。彼は私のベッドの隣で彼のイスにお座りになりました。

このイスがどこから来たのか、私には全くわかりません。それはたいてい、彼が座ろうとされるやいなや、現れるのです。それは金でできた美しいイスです。たいていのイスに似た形をしています。背もたれ付きです。一つ一つの脚に回転する車輪が付いています。

イエス様は私にあいさつされ、片手を私のほうへ差し出され、起きなさい、時間が速く終わろうとしているからです、と私に言われました。彼は私の片手を引き上げられ、私はベッドの上で座りました。

それから彼は私に、「ビクトリア、祈りましょう」と言われました。彼は、私には理解できない言語で祈られました。私は、「アーメン」ということばしか理解できませんでした。

● 恵みを分配する天使たち

それから彼は私が何をみているかとお尋ねになり、私は彼に、自分たちの仕事に出かけて行く人々と、自分たちの仕事の場所に着いている人々を見ていると話しました。

私はまた、あの同じようなとても小さな白いビーズが、自分たちの仕事の場所に最初に着いた人々の上に降っているのを見ました。

その最初のグループの後、別のグループの人々も遅れて着きました。そのころには、そのとても小さなビーズの雨は降り終わっていました。

また、ある日曜日の午前にさまざまな教会に、さまざまなグループの人々が着くのも見えました。あの白いビーズの雨は、早く来た人たちが教会の敷地に入ったとたんに降り始めました。

それは、しばらくの間降り続き、それから止まりました。遅れて来た人たちは何も見出すことはありませんでした。

イエス様は私に、これらの幻の意味することを理解できたかどうかをお尋ねになり、私は理解できませんでしたと彼に話しました。

それから彼は私にこう説明されました。

「これらの幻の意味は、こうです。どこであっても、あなたがある指定された時間にいるべきであると考えられていて、自分でも何時にそこに自分がいるべきだとわかっている場所には、そこには常に、その指定された時間のための恵みを分配する天使たちがいるのです。

もしあなたが時間通りに着けば、あなたの恵みを受け取ることになりますが、もし遅刻すれば、あなたはその日のためのあなたの恵みを受けそこねることになります。なぜなら、その天使たちは、その指定された時間のためのものとしてだけ、その恵みを分配するからです。

ビクトリア、あなたに警告したいと思います、なぜなら、あなたは仕事に遅刻しており、教会の集会には特に遅刻しているからです。

あなたは、あなたが遅刻してきたそれらの時、何の正当な理由もなかったということを知らなければなりません。あなたは、それらの日々のためのあなたの恵みを、永遠に受けそこなってしまったのです。それらの恵みがふたたびあなたのもとに戻ってくることは決してありません。

ビクトリア、あなたはこのことを止めなければなりません。そして、これからはそれをふたたびしてはいけません、あなたに遅刻する正当な理由がないのなら」

主がそれらのことばを言われた時、私は自分が消えてしまうか、自分の規律の無さについて何か受け入れてもらえそうな言い訳をすることができたらいいのに、と本当に思いました。

私は主に、私は時々寝過ごしてしまうことがあると言いましたが、彼は私の目をまっすぐに見つめられ、私は横たわっていたということと、私には目が覚めた後もベッドに戻る悪い傾向があり、『あと数分』眠りたいという願望に屈服していることを語られました。

イエス様は私に警告された後、こう言われました。「立ちなさい、さあ行きましょう。時間が速く終わろうとしており、私たちがしなければならぬことがあります」

● 天国への訪問

今度は、主は、私がそれまで一度も行ったことのない場所に私を連れて行かれました。私たちがその道を歩いて通ったのも、その日が初めてでした。 私たちはある園に着きました。そこは、美しい花々や美しい緑の木々で満ちていました。地上のどんなものも、この美しさとは比べものになりません。その花々は、美しくて明るい、あらゆる種類の色をしていました。

私たちは、ガーデン用の美しいベンチに座りました。それは金でできており、明るい輝きのある銀の小さな星々が付いていました。

私たちが座ると、彼は私たちの前を指差され、こう言われました。

「ビクトリア、見なさい、あの都が見えますか？」

私が目を向けると、非常に大きな、明るく輝いた都が見えました。それは、描写できないくらいに美しいものでした。

その都には、明るく輝いている金の門があり、その門のところに、一人の年輩の男性が座っていました。彼には長くて白いあごひげがあり、髪は白色でした。私は以前にこの男性を見たことがありました。私がイエス様に、この男性はだれですかと尋ねると、彼は、それは信仰の父、アブラハムであると私に言われました。

その都の中に多くの道が見えました。それらの道も金で舗装されています。高くそびえるビルがいくつもあり、それらも金のように輝いていました。その都の中の輝きやきらめきは、描写することが

できません。

● カラスやフクロウの住まう場所

イエス様は私のほうを向かれて、こうお尋ねになりました。

「あの都について、どう思いますか？」

私は、それは美しいし、自分もそこに行きたいと答えました。イエス様は言われました。

「もしあなたが従順であり続けられれば、私はあなたをそこへ連れて行きましょう。なぜなら、そこは、あなたの家があるようになる所でもあるからです。

従順でいなさい。なぜなら、もしあなたが不従順であれば、ピクトリア、あなたの家の中でカラスたちが飛ぶようになるからです。あなたの家はフクロウたちの住まう場所、また、幽霊どもの運動場となります。

しかし、恐れてはいけません、私はあなたといっしょにいるからです。ただ従っていなさい。だれでも不従順な者にとって、その家は、カラスたちがそこを飛ぶようになります。それは、フクロウたちの住まう場所、また、幽霊どもの運動場となります」

イエス・キリストは現実のお方であられ、彼は、描写できないほどの愛をもって私たちを愛しておられます。彼の最大の願いは、私たちが命を選び、彼といっしょに永遠を過ごすことです。

死んで地獄に行こうとしているすべての人々のために、彼の心は痛んでいます。なぜなら、彼らは、イエス・キリストが彼らに差し出してくださった救いを拒むことを選び取り、代わりに、死を選び取ったからです。

あなたが新しく生まれ変わっているクリスチャンであってもなくても、どうかいつもこの一つのことを覚えておいてください。時間が速く終わろうとしていることをです。

★☆☆ あなたに100パーセント 関係のある

100パーセント 本当のことです！★☆☆

《私は外の暗闇に連れて行かれた!》

…元『エホバの証人』信者 ヘイディー・コルテスの体験
(プエルトリコ)

(Copyright c..エターナル・ライフ・ミニストリーズ)

<http://www.eternal-lm.com>

<http://www.tengokujigoku.info>

この表示付で紙面でのコピー・印刷・無料配布は自由です。

インターネット上への内容または画像の転載等は禁止されています)

1970年、私はプエルトリコのアレシボで、カルト「宗教」の中でバプテスマを受けました。その宗教団体は、父なる神を唯一の真の神と信じていました。

私は、「イエス・キリストは神ではなく、父なる神によって創造された者である」と彼らから教えられていました。私は、「死後に命は存在しない、まして、私が死ぬ時に体から離れるような、意識のある霊は存在しない」と教えられていました。

私は、「どんな奇跡のいやしも信じてはいけない」、「神が幻や夢を通して人々とコミュニケーションをなさると信じてはいけない」と教えられていました。

また私は、「どんないやしも、奇跡も、幻も、悪魔のわざだ」と教えられていました。私はそういう教えにとっても忠実で、26歳になるまでは、だれも私に異議を唱えることができませんでした。

神はその時、私がそれまで『エホバの証人』たちから教わって信じていた私の思い違いの世界を揺り動かしてくださったのです！

● 帝王切開の手術

1973年9月12日、私は帝王切開の手術を受けようとしていました。手術室で、私の腹部の上にオレンジ色の液体が塗られ、麻酔の注射が打たれました。私は不思議な感覚を覚えました。私の体は硬直してきましたが、頭は覚めたままでした。私は自分の腹部が切開されようとしていることを認識しており、眠ってはいなかったのです！ 私は意識があることを医師たちに知らせようとして体を動かしたり叫んだりしようとしたのですが、どんなに努力してもむだでした。

医師たちが私の腹部を切開し始めた時、私は激痛を感じました。

突然、聞こえる声で、こう言うのが聞こえました。

「あなたに起ころうとしていることを見なさい！」

その瞬間、私は自分の肉体の中から引き出されました。そして気が付くと、私はその部屋の天井にいました。私はその場所から、私の胎から私の赤ちゃんが取り出されようとしているのを見ました。

私は非常に悲しくなり、こう独り言を言いました。

「つまり、私の地上でのことは全部終わったということなのね」

私はその赤ちゃんをぜひ見たいと思いましたが、私の腕に抱くこともできませんでした。

「私はどうすればいいのかしら？ 私の子どもたちは私のことを全部忘れてしまうわ」

それから私は**上昇**し始めました。私は、自分が堅固な体を持ってはいないことがわかりました。私は、何らかのエネルギーによる力によって**高速で移動**していました。まるで、円形運動のようにです。

けれども、私は**意識**がしっかりしており、どんな**記憶力**も備わっていました。私は自分が**地球を離れ去った**こともわかりました。

私はどんどん上って行きました。気が付くと私は**真っ暗な場所**にいました。私はとてもとまどいました。私は質問をし始めました。

「ここは宇宙なの？ 私はどこにいるの？ 私はどこに行こうとしているの？ 私はずっとここにいることになるの？」

? 拷問の苦しみの世界！

突然、私は非常に不思議なものを感じ始めました。それは**苦痛か拷問**であるとしたか、私には表現できません。私は**激痛**のようなものを感じ始めました。

私はそこから抜け出したいと思い、私の肉体に戻りたいと思いました。私はその**拷問の苦しみ**に耐えられなかったのです。

私は肉体から抜け出る前に聞いた、あの耳に聞こえる声があったことを思い出しました。

「あなたに起ころうとしていることを見なさい！」

私は**悲鳴**を上げ始めました。

「**お願いです、私にこのことが起きないようにしてください！** 私が二度と地球に戻ることはないのは構いません。私が二度と私の子どもたちに会うことがないのは構いません。**でも、私がずっとここにいるのは、受け入れることができません。**できません。お願いです！ 私にこのことが起きないようにしてください！」

それから、数々の声が同時にこう言うのが聞こえました。

「これはあなたが信じるようになるためです！」

私は叫んで言いました。

「私は全能の神を信じているだけです！」

私が感じていた拷問の苦しみは、止まりました。

それから私は**高速で下り始めました**。気が付くと、私はあの病室の天井に戻っていました。この時は、私の肉体は担架の上に横たわっていました。

一人の看護師が私の顔を軽くたたき、「ヘイディー、目を覚ましなさい！」と言うのが見えました。

私が私の肉体のほうに下って近づいていく間も、彼女の顔がはっきり見えました。それから私は私の肉体の中にゆっくり落とされました。その看護師はまだ私の顔を軽くたたいて、私の名前を呼んでいました。

私が目を開けると、私の顔の真ん前に彼女がいました。私は彼女の目を見つめながら、こう思いました。

「私がたった今行ってきたばかりのところを、あなたにわかってもらえたらいいのに！」

● 私は今までだまされていた！

私は、その体験のことを私の頭から閉め出すことができませんでした。私はこの世の人々について、また、彼らが**永遠を過ごすことになる場所**について、深く関心を持つようになりました。私は、信じるようにと自分が教えられてきたことによって、**自分がだまされていたことがわかる**ようになりました！

肉体から抜け出て、意識のある霊は、実際に存在するのです。人々は自分に何が起こり得るのか知らないでいます。**彼らはこのことについて知る必要があります**。彼らは**警告**を受ける必要があります！

私は退院して家に帰る時、自分の肉体から抜け出ることになるということを知らないでいる、この世のすべての人のことを考えました。彼らは死ぬ時、完全に意識があり、自分の死んだ肉体を残すことになるのです。さらに、彼らは私と同様に、**あの真っ暗な闇に行く**かもしれません。私は自分の頭がおかしくなってしまうように感じました。私はどうすればよいかわかりませんでした。私は人々の命が助かるように、みんなにそのことを警告したいと思いました。

● 腎臓病と顔面麻痺

私は帝王切開の手術を受ける前、**腎臓病**をわずらっていました。私が退院してから七日ほどたったころ、私の左側の腎臓に激しい痛みがありました。

ある日の朝、私がベッドから起き上がると、とても不思議な感覚がありました。私は顔に異様な感じがしたので、鏡を見ると、私の口が横にゆがんでいるのに気付きました。私の左目は、まばたきすることも、閉じることもできませんでした。

私はヒステリックになり、病院に駆け込みました。私の子どもたちは夫といっしょに家に残して行きました。医師は、私が**顔面麻痺**であると告げました。

私は顔面治療を受けるようになりましたが、それは、神経の動きを回復させるために、小さな電気ショックを顔に施すというものでした。

私の家庭医が私を訪れ、顔面神経が死んだように見えると言いました。それから彼はこう言いました。

「ヘイディーさん、残念ですが、あなたはそのような表情がずっと続くことを受け入れなければなりませんでしょう」

私はまだ26歳でした。それは私にとって、この世の終わりのようでした。

私の一連の顔面治療が終わろうとしていた時、私は何か不思議な**めまい**を経験するようになりました。私は少しずつ別の次元の中に入り始めました。私は自分の記憶を完全に失いました。私は子どもたちや赤ちゃんに食事を与えたかどうかもわからなくなりました。

家の壁のように見えるものが私の上に落ちてくるのが見えました。私が家の外に出ると、木々や雲が私の上に落ちてくるかのようでした。すべてのものが、ゆがんでいました。それは恐ろしいことでした。

私は絶えず泣いて、せめて、私が子どもたちに、特に赤ちゃんに食事を与えたかがわかるようにしてくださいとエホバに願いました。

私の皮膚は黄色になり、私の家族や近所の人たち（彼らがあとで私に話してくれました）は、私が死ぬことになると思っていたそうです。私は体が日ごとにますます衰弱していきました。当時、私の夫が朝、家から出かけると、私は一日中ずっと私の子どもたちといるだけでした。夜、夫が帰宅するまで、そうでした。私には子どもの世話を手伝ってくれる人が一人もいませんでした。

ある日の晩、私は信じられないくらいに体が衰弱しているのを感じました。私は自分が死のうとしているとわかりました。私の子どもたちは眠りに就き、私は私の五歳の息子のとなりに横たわりました。彼は私をととても助けてくれていました。私が死ななければならぬのなら、私は彼のそばで死にたかったのです。

私は彼を私の片方の腕で包み、私の神の御名を呼び始めました。私はこう言いました。

「エホバよ、もし私が死ななければならぬのでしたら、あなたの御名を呼びながらそうしたいと思います」

私は「イエス・キリスト」ということばを口にしませんでした。なぜなら、私はまだ彼を信じてはいなかったからです。私は「肉体から抜け出る」ことをすでに体験しており、私は肉体の中にある霊であることも知っており、暗闇や苦痛も経験していましたが、まだイエス様を私の救い主として信じていませんでした。

朝、私が起きると、さらに衰弱していました。私の息づかいはとても重くなっており、私の両足はとても弱くなっており、私は死が間近にちがいないと悟りました。私は寝室から歩いて出ると、床の上で倒れました。私の骨々の内部に、描写できないくらいに異様な冷たさがありました。そして、私は呼吸困難になりつつありました。私の頭の中には、私が死のうとしていることに何の疑いも存在しませんでした。

私はそっと言いました。「エホバよ、私に勇気をお与えください、死ぬため、そして私の幼い子どもたちと別れるために。あの子たちには面倒を見てくれる人がだれもないのです」

● 「彼女のところに行きなさい！」

突然、私の前に一人の婦人が立っているのが見えました！ 私は、その婦人は近所のペンテコステ派のクリスチャンだとわかりました。彼女は私の家から何軒か離れたところに住んでいました。

私はかつて、道で彼女を見かけたら、向きを変えていました。私は彼女からイエス様についての話を聞きたくなかったのです。

私が彼女をじっと見ていると、耳に聞こえる声がこう言うのが聞こえました。

「彼女のところに行きなさい！」

私はその声に答えて言いました。

「私はペンテコステ派の人の前で屈辱を味わうつもりはありません！」

その声がふたたび私にこう言いました。

「彼女のところに行きなさい！ あなたにチャンスがあります！ あなたは死のうとしているのです！」

その声がそう言った時、私はそれは真実だとわかりました。私は死を間近に感じていたからです。

私はその婦人の家に行くことにしましたが、いやしのためにお祈りしてもらおうと考えていたわけではありません。私は奇跡を信じていなかったからです。

私は五歳の息子を呼び、私とその婦人の家に行くのを手伝ってくれるように言いました。彼は私の手を持ち、とても喜んで手伝ってくれました。私は彼に、もし私とその婦人の家に行く途中で倒れたら、だれかに助けを求めて私を病院に連れて行くようにと言いました。彼はそれに同意してくれました。

私たちはその婦人の家に着き、玄関のポーチに入りました。その婦人は私を見ると、目を見開いてこう叫びました。

「まあ、こんな状態で、ここで何をしておられるの、お嬢さん？」

私は言いました。「アンナ夫人、私がここに来たのは、神様が私に死ぬ勇気を与えてくださるようにと、あなたにお祈りしていただくためです。私はきょう死ぬはずです。すると、私の子どもたちには面倒を見てくれる人がだれもいなくなります」

彼女は私に大胆にこう言いました。

「あなたにお話しさせてください！　きのうの同じイエス・キリストは、きょうも同じイエス・キリストです！　彼は変わってはられません。彼はあなたをいやして下さいますよ、あなたが彼を信じられるようになるために」

私はそういうことばを聞きたくありませんでした。

彼女はこう言いました。「おうちに帰って、お祈りしてください。私はここであなたのために祈ります。そうすればあなたはいやされます」

彼女は私に、油の入った小さな瓶をくれました。そして、私の体の痛いところならどこにでもその油を塗りなさいと私に言いました。

「なぜなら、聖書が、病人たちに油を塗って祈りなさいと言っているからです。

ヤコブ5・14にこう書かれています。

『あなたがたの中に、だれか、病弱でいる人がいますか？　その人は教会の長老たちを呼びなさい。そして彼らは、主の御名によってその人にオリーブ油を塗って、その人のために祈りなさい。そうすれば、主がその人をいやして下さいます』」

それから私はその家を後にしました。ただし、私は彼女のことばで少し当惑していました。

●祈りが聞かれる！

私は家に帰り、玄関から入ったとたん、床にひざまずくように促されるのを感じました。私はその油を取り出し、私の額の全体にそれを塗りました。（私が自分の感覚を持つのも、厳しい試練でした。私は何か不思議な次元の中に浸かっていたのです）

私はそれを私の左の腎臓の上に塗りました。それから私は祈りたいと思いました。

私は天を見上げ、こう言いました。

「お父さま、イエス・キリストの御名によって、また、あなたの聖霊の御力によって、私をいやしてください。あなたが私のために行なってくださいどんなことも、私はこれから語っていきます」

次の瞬間、私は電気が私の足のつま先に入るような感じがしました。それは私の全身を通過して上って行き、私の頭に達しました。そこで、それはしばらくとどまりました。それから、その電流は私の体から離れました。

私は起き上がり、窓の外を見ました。木々は、ゆがむことなくそのままの場所にありました！　私は叫んで言いました。

「今まで通りの世界になってるわ！ あの痛みが左の腎臓からなくなっているわ！」 私が鏡のところに駆け寄ると、私の顔は正常に戻っており、私の知性もはっきりしていました。

私は家の周りを叫びながら走り始めました。

「イエス・キリストが今でもいやしてくださるのは、本当だわ！ イエス・キリストが今でもいやしてくださるのは、本当だわ！」

私はとても良い気分でした。私は家を掃除し、料理を作り、私の幼い子どもたちに食事を与えました。

その晩、私の夫が帰宅すると、私は何気なく、夕食をとりたいかと彼に尋ねました。彼はまるで幽霊を見ているかのように私をじっと見つめ、こう言いました。

「君に何が起きたんだい？」

私は、わざとこう尋ねました。「どういう意味？」

彼は叫んで言いました。「何が起きて、君はそんなに元気になったんだい？」

私は言いました。

「何が起きたのか、知りたい？ イエス・キリストが私をいやして下さったのよ！」

私の夫は叫んで言いました。「私たちはその教会に行かないといけないね！」

私はこう自問しました。「その教会に？ 彼はどの教会のことを言ってるのかしら？ あのペンテコステ派の教会のことでなければいいんだけど」

しばらくして、そのペンテコステ派の近所の婦人が私を訪問して、私の具合を尋ねました。

私は彼女にこう言いました。

「イエス・キリストが私をいやしてくださいました！」

彼女は言いました。「あなたは教会に行って、この奇跡のことを証ししないとイケないわ！ あなたがそうしなくなった時は私に知らせてください。あなたを教会にお連れするわ」

私は、ためらいと、気乗りしない思いとを抱いたまま、こう答えました。「考えておきます」

● 真理があるところは？

彼女が帰るやいなや、私は寝室に入りました。私は天を見上げて、こう言いました。

「あなたは私に、私には霊があることを教えてくださいました。

あなたは私に、イエス・キリストが今でもいやして下さることを教えてくださいました。

真理があるところを、今、私に示してください。

私はあなたにお仕えすることをお約束します」

ただちに一つの声が聞こえました。この時は、その声は私の頭の内部でした。私はその声がこう言うのを聞きました。

「私が道であり、真理であり、命なのです。私を通してでなければ、だれ一人御父のもとへ来る者はいません。

私とその門なのです。もしだれかが私を通して入るなら、その人は救われるようになります。

私が、この世の光なのです。この私について来る者は、決して闇の内を歩むようにはなりません」

(ヨハネ14・6、10・9、8・12)

突然、私の知性が大いなる理解力をもって開かれました！ 私はこう言いました。

「あなたは、だれ一人御父のもとへ『来る』者はいないと言われます。あなたは、だれ一人御父の

もとへ『行く』者はいない、とは言われません。つまり、イエス様、あなたと御父とは一つなのですね！」

ここで神は、私がかつて教わってきた数々の偽りの洗脳連鎖の環を、また一つ壊してくださったのです。

私は言いました。

「あなたは、あなたが光であられ、もし私があなたについて行くなら、私は闇の内を歩むようにはならない、と言われます。それは、私の宗教団体が私に教えたものではありません。彼らは、もし私が彼らから離れたら、私は闇の内を歩むようになる、と言いました。あなたは、あなたが真理であられると言われます。ですから、真理は、何かの宗教団体のことではありません。あなたこそが真理であられます！」

私は、ペンテコステ派の人たちがあなたのことを宣べ伝えていることを、確かに知っています。ですから、私はあのペンテコステ派の教会を訪れることにします」

近所の人々はみな、神が私になさった奇跡を見ました。私の皮膚も正常な色に回復しました。私がああ医師のところに行きましたが、尿検査の結果も正常でした。その医師は私にこう話しました。

「ヘイディーさん、あなたの尿検査が陰性になったのは、この二年間で初めてのことです」

私はその医師に証しするチャンスがありました。彼はそれが奇跡であることに同意しました。

その医師のオフィスから出ようとした時にその秘書が私に話してくれたことですが、彼らは私が死ぬと思っていたそうです。その後、私は超音波検査を受けました。すると、私の腎臓は左右二つとも正常な大きさと全く健康であることがわかりました。神様に栄光がありますように！

それから私はイエス・キリストを私の個人的救い主また主として受け入れることを決意し、そのペンテコステ派の教会を訪れるようになりました。私は、そのペンテコステ派の教会に通い続け、私の命を神様に献げました。

●すばらしい、驚くべき体験！

ある時、私がおの教会で主を礼拝していると、私の体に電気が通っているかのように感じました。そして、私の全存在が、描写できないような喜びで圧倒されました。そのうっとりするような喜びの中で私が主をほめたたえ続けていると、私の口から、それまで一度も話したことのない言語が出て来るのに気付きました。私は何が起きているのかわかりませんでした。崇高な喜びに包まれていました！

最後は私は静かになりました。（私が経験したことを、みなさんも経験できたなら、みなさんもきっと感激したはずです）そして私はあの近所の婦人、私のいやしのために祈るよう神が用いてくださった人であるアンナ姉妹に尋ねました。

「私に何が起こったんでしょうか？」

彼女は大きな微笑みを浮かべて答えました。「あなたはたった今、聖霊のバプテスマを受けたんですよ！」

私は床にひざまずき、こんなにすばらしい、驚くべき経験を、神に感謝しました。私は、神が私に分け与えてくださったばかりのその御力と恵みで喜びにあふれていました。

●私の子どもたちには私が必要なのです！

私が次にお話ししようとしていることが、少し「びっくりさせること」、少し「不思議なこと」と思われることを、私も自覚しています。私がそれをお話ししないのは簡単なことですが、なぜか、私は神が私にそれをお話しするのを望んでおられると感じており、そうすることにします。もしかすると、それを聞く必要のある人が、だれかいるのかもしれませんが。

私が教会で尊い聖霊のバプテスマの経験をしてから数日後のことです。夜のある時間、私は目を覚ましてベッドから起き上がり、二、三步、前に進みました。ドアのほうへ歩きながら私のベッドに目を向けると、私の夫がその上に横たわっているのが見えました。

ところが驚いたことに、**私の肉体もそこにあっただのです！**

次に私は自分自身を見てみました。この時、私には**体**がありました。私は両腕を前に伸ばし、この新しい体を見ました。私は**自分が死んだ**のだとわかりました。私は私の子どもたちの寝室に目を向けると、彼らと別れるのが悲しくなりました。

私はこう思いました。「私の子どもたちが目を覚ましたら、私が死んでいるのを見ることになるわ。死体を埋葬して、私のことをすべて忘れていくようになるのね。彼らには面倒を見てくれる人がだれもないわ、かわいそうな我が子たち」

それから私は床にひざまずき、祈り始めました。

「どうか、お父さま、あなたの御子イエス・キリストの御名によって、私を私の肉体に戻してください。**私の子どもたちには私が必要なのです**」

私は、ある**力**が私を床からゆっくりと持ち上げるのを感じました。そして私はベッドの上の私の肉体の上方に置かれ、そしてゆっくりと降りて行き、最後はその内部に落ちました。

私はすぐに目を開けようとしたのですが、目は開きませんでした。私は動こうとしたのですが、体は壁のように硬直していました。動こうとどんなに努力しても、むだでした。私は死に物狂いで祈りました。

「お願いです、主よ、私の子どもたちには私が必要なのです。彼らには、きちんと面倒を見てくれる人がだれもないのです。私を生き返らせてください！」

私は、**私の全身を貫く命の力**や私の心臓の鼓動を感じ始めました。それから私が目を開けようとすると、今度は目が開きました。それから私は指が動くか調べると、指は動きました。それから私は驚異に圧倒されつつベッドから跳び出しました。

私はこの証しをさまざまな教会で話す機会が与えられ、大ぜいの人が彼らの心を**私たちの主イエス・キリスト**に献げています。

時間をさいてこの証しをお読みくださり、感謝します。すべての栄光が神様にありますように！

(Copyright c..エターナル・ライフ・ミニストリーズ

<http://www.eternal-lm.com>

<http://www.tengokujigoku.info>

この表示付で紙面でのコピー・印刷・無料配布は自由です。

インターネット上への内容または画像の転載等は禁止されています)

● ホームページ『天国と地獄の情報』もご覧下さい→www.tengokujigoku.info